

保育現場における気になる子どもの保護者支援

—気になる子どもと似た特性のある保護者の実態把握—

守 巧 ・ 松井 剛太*
(東京福祉大学短期大学部) (幼児教育)

372-0831 群馬県伊勢崎市山王町2020-1 東京福祉大学短期大学部
*760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

Developing Support for Parents of “Difficult Child” in Early Childhood Education: Monitoring of Parents who have Similar Traits with Their Child

Takumi Mori and Gota Matsui*

Junior College, Tokyo University of Social Welfare 2020-1 Sanno-cho, Isesaki, Gunma 372-0831

**Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

要 旨 本研究の目的は、保育現場において、「気になる子ども」と似た特性を持つとされる保護者への効果的な支援を検討する上で、まず「気になる子ども」の保護者の特性がその子どもの特性と重複する部分があるかどうかの実態調査を行うことであった。幼稚園・保育所の保育者に質問紙調査を行った結果、45%の保護者が、気になる子どもと似た言動をしていることがわかった。今後の課題は生態学的な視点から支援を検討することである。

キーワード 気になる子ども 保護者支援 保育現場

I. 目的

(1) 保育現場における「気になる子ども」

近年、保育現場では、「気になる子ども」という言葉がテクニカルタームのように使用されている。幼稚園教諭・保育士が「気になる子ども」と表現する背景には、同定できない曖昧な表現にせざるを得ない必要性がある。すなわち、「気になる子ども」の「気になる様子」は、発達の個人差の範囲なのか、発達障害に起因しているのか、養育者の不適切な関わりや環境に起因しているのか、保育者の子ども理解の問題か、と複数の要因が混在していることが推測さ

れるからである。そのため、「気になる子ども」という言葉は、研究の視点に応じて捉え方に異なりをみせる。また、「ちょっと気になる子」、「気になる子」、「気になる」子、「気になる子ども」というように言葉の使用も統一されていない(久保山ら, 2009)。本稿では、便宜上、「気になる子ども」を使用して論を進める。

今日まで、「気になる子ども」に関連する研究は数多い。本荘(2012)は、「気になる子ども」に関する先行研究を概観し、その傾向を時代的変遷とともに述べている。それによると、「気になる子ども」の研究は、1980年代後半からいくつか見られるようになり、1990年代から

は、保育者が何か気がかりな点を持つと感じる子どもとして、色々な状態を含めたニュアンスで「気になる」という表現が使用されるようになったという。さらに、このニュアンスも社会的背景に応じて変化する。1990年代後半からは、保育者の子ども理解の枠組みが問われるものが多いが（名須川，1997；刑部，1998；水内ら，2001），徐々に発達障害との関連から子どもの発達特性や行動特徴（本郷ら，2003；中村ら，2005；平澤ら，2005；嶋野，2011）を明らかにする研究へと移っていった。そして、近年では、「気になる子ども」だけでなく、「気になる保護者」の実態を明らかにする研究が散見され始めている（久保山ら，2009；黒川，2011；木曾，2011）。

以上のことから、「気になる子ども」の研究は、保育者の保育観や子ども理解の課題、気になる子どもの発達の課題、気になる子どもの保護者の特徴や家庭環境を含めた養育の課題というように移行していったと考えられる。では、「気になる子ども」の保護者への支援に関連する研究はどのようなものがあるだろうか。

（2）「気になる子ども」の保護者支援

今日の保育現場では「気になる子ども」とともに「気になる親」が増加しており、子どもの保育と同じ比重で親との対応・関わりにエネルギーを使わなければならないという実感を多くの保育者が持っている（黒川，2011）。しかし、「気になる子ども」の保護者支援に関する研究は多くない。木曾（2011）は、発達障害が疑われる「気になる子ども」の保護者支援に関して、保護者と保育士との関係から保育士の困り感の変容過程を分析している。それによると、保育士は保護者に関わる際にまず「子どものため」の思いを持って訴えるが、保護者との対立を経て、「保護者に合わせる」方向へと変わるといふ。しかし、保護者に合わせる方向へ変わっても、「子どものため」の思いを持ち続けるために、そこで葛藤が生じて困り感が生まれることを指摘している。つまり、保育士の有する困り感は、「子どものため」という思いを優先した

いが、「保護者のため」との思いも捨てられないというように、「子ども」と「保護者」の狭間で思いが揺れる状況を想定している。

このような困り感は、子どもに発達課題がありそうな状況で、家庭での養育の重要性を強調したいときや、専門機関を勧めたいときに生じやすいと推察される。すなわち、保育者にとっては、「子どものため」を思うと、養育環境の改善や多様な支援が必要になる一方、「保護者のため」を思うとそれを強いるようなことは伝えづらいという状況である。しかし、木曾（2011）が述べるように、この困り感の過程は、身体・精神疾患の有無など保護者自身の要因によって変わる。久保山・小林（2000）が指摘するように、保護者が保育者に求めているのは、保護者の話を聞くことであり、その話を踏まえた対応である。つまり保育者は、保護者との対話時に保護者自身の要因を踏まえた対応が求められる。

ここで、保護者自身の要因として一つ想定されるのは、「気になる子どもと似た特性を持つ保護者」である。近年、発達障害は多様な要因によるエピジェネティックな変化が引き金となることがわかってきた。杉山（2011）は、人の遺伝的素因として認知の発達凸凹（でこぼこ）があり、加えて、生活していく中での環境不適合が加わることによって発達障害が生じることを指摘している。例えば、大人になって発達障害と診断される場合、それまで発達凸凹があっても環境的に問題にならなかったが、子育てによるストレスが加わり、発達障害の所見が見られるようになったというものがある。さらに、多くの臨床研究から、子どもが自閉症スペクトラムという場合、養育者も自閉症スペクトラムという場合が多く、特に母子ともに自閉症スペクトラムという場合が散見されると述べている。このようなことから、気になる子どもの行動特徴と養育環境上の課題はしばしば関連づけられる（例えば郷間ら，2009）。

この知見に基づけば、発達凸凹があるために気になる状況にある子どものケースでは、保護者も遺伝的に似たような発達凸凹を有していることになる。実際、筆者も巡回相談などで、気

になる子どもとその保護者が似ている行動特徴を有していることを耳にすることが多い。また、気になる子どもの行動を保護者に伝えたときに、「私も昔そうだった」など、保護者自身が自覚している場合も見られる。このようなケースで仮定されるのは、子ども自身の要因、保護者自身の要因というよりも、子ども－保護者間、さらには家族の関係性の要因によって、気になる状況が発生・強化されているということである。

(3) 目的

本研究では、「気になる子ども」と似た特性を持つとされる保護者への効果的な支援を検討する基礎研究として、まず「気になる子ども」の保護者の特性とその子どもの特性に関する実態調査を行うことを目的とする。

II. 方法

(1) 調査対象

幼稚園教諭及び保育士を対象に質問紙調査を行った。総配布数は、248部で有効回答数は198部であった。回収率は、79.8%であった。

(2) 手続き

郵便法を用いた。併せて幼稚園教諭及び保育士を対象とした研修会に参加した際に実施した。配布・回収期間は2012年11月中旬～12月下旬であり、郵送、FAX、筆者らの手渡しのみずれかの方法で回収した。

(3) 調査内容

アンケート構成は、【1】属性、【2】気になる子どもを対象とした項目、【3】気になる子どもの保護者を対象とした項目の3部構成とした。

(4) 調査項目及び分析の方法

調査項目は、28項目で、選択肢と自由記述欄を併用した。「【1】属性」を尋ねる項目が6項目、「【2】気になる子どもを対象とした項目」が11項目、「【3】気になる子どもの保護者と対象とした項目」が11項目である。なお、調査対

象保育者の「気になる」という定義の混乱を避けるため、『「気になる子ども」とは、明確に障がいの診断はなされていないが、他児との関わりや気になる言動と感じられる子どものこと』と明記した。

調査項目の選出にあたっては、筆者らが保育実践上で直面している「気になる子ども」とその保護者の困り感など関連事項を検討した。第1予備調査では、検討した項目について、幼稚園教諭(12名)、保育士(10名)に実施し、項目内容が妥当かどうかを調べ、項目の精査を行った。

分析は、項目別に集計を行い、自由記述の項目については、KJ法を参考にして、カテゴリーの抽出をし、解釈を加えた。

III. 結果

(1) 回答者の属性

対象保育者の年齢は、25～29歳が最も多く28%、次いで20～24歳の22%、30～34歳の11%であった(図1)。20～34歳の保育者が全体の62%を占めた。運営主体は、私立が73%と多かった(図2)。また、勤務先の園種は、幼稚園が57%、保育所が21%であった(図3)。

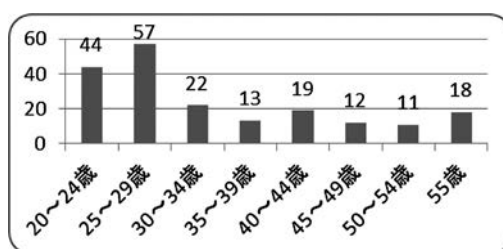


図1 対象保育者の年齢

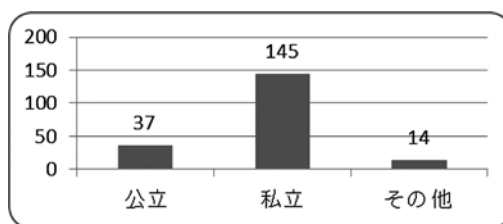


図2 勤務先 (運営主体)

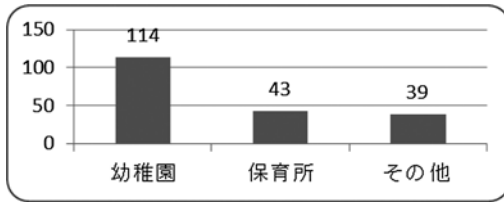


図3 勤務先(園種)

(2) 気になる子どもに関する項目

気になる子どもが増加していると思っている保育者は、88%であり、橘川ら(2011)の調査と類似した値で、多くの保育者が気になる子どもが増えたことを実感している(図4)。「気になる子どもの気になる言動がよく見られるのはどの場面ですか」は複数回答を可にして質問をした。結果、多い順に「集団場面(制作・運動等)」の152名(38%)、「自由遊び」の110名(27%)、「食事場面」の64名(15%)であった(図5)。ここから、「気になる子ども」が集団での活動を通して「気になる」と捉えられている傾向があることがわかる。「気になる子ども」の原因として、よく当てはまると思うものは何ですか」は複数回答を可にして質問をした。多い順に「保護者の養育態度」が153名(25%)、「生活リズムの変調」が94名(15%)、「核家族化」「食生活の乱れ」が69名(11%)、「メディアの影響」が52名(8%)であった(図6)。原因と思われる要因の大半が、家庭の状況や保護者の養育態度に関連するものであり、保育者は不適切な家庭環境からの影響を原因と捉えていることが明らかになった。

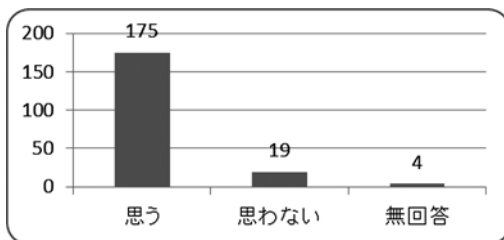


図4 気になる子どもが増加していると思うか

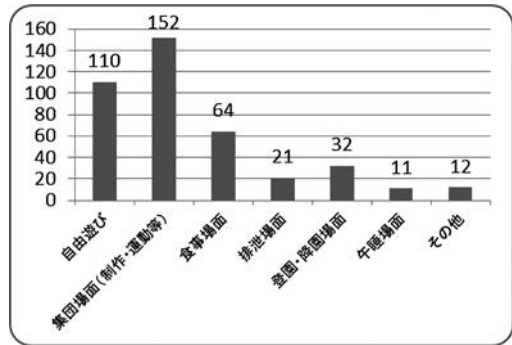


図5 気になる言動の場面(複数回答可)

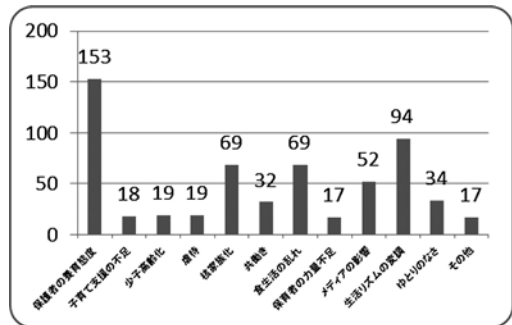


図6 気になる言動の原因(複数回答可)

(3) 気になる子どもの保護者に関する項目

「気になる子どもの保護者の対応に困っていますか」の質問に対しては、「よくある」「ある」と回答した保育者は、64%であり、多くの保育者が対応に困窮していることが窺える(図7)。「気になる子ども」の保護者対応に困っている保育者は、以下の項目が困り感を抱いていた。多い順に「子どもの気になる言動を気にしない」は71名(25%)であった。次いで「伝えたことがうまく伝わっていない」が67名(23%)、「感情にムラがある」が34名(12%)、「会話がかみ合わない」が32名(11%)、「子どもに厳しい言動がある」が29名(10%)、「他の保護者との関係が築けない」が22名(7%)であった(図8)。特記すべき事項として、「子どもの気になる言動を気にしない」保護者とのコミュニケーションに苦心している様子が理解できる。全体として保育者は、保護者とスムーズに意思疎通がとれないことに困り感を抱いていることが理解できる。

次に、「気になる子ども」とその保護者の類似性を感じている保育者は、45%であり、約半数の保育者が何らかの類似性を感じている（図9）。また類似性があると予想される対象者の大半は、母親（60%）であった。

「気になる子どもの保護者の言動が気になる子どもの言動に似ていると感じたことがある」の質問に対して「よくある」「ある」と応えた保育者に対して、似ている姿を自由記述で質問をした。表1は、カテゴリー別の特徴的な保護者の姿、またはエピソードである。

回答の総数は、130であり、似ている回答を分類した結果、13カテゴリー（その他も含む）が抽出された。最も多かったのは「会話不成立・意思疎通困難」（27）であり、次いで「暴力的言動」（20）、「人間関係」（11）、「自己中心的行為」（10）であった。上位4項目はいずれも「コミュニケーション」に関係するものであることが大きな特徴と言えよう。つまり、保育者は気になる子どもとのコミュニケーションのあり方に困り、その対応を探る上で保護者との相談をするが、保護者とのコミュニケーションにおいて

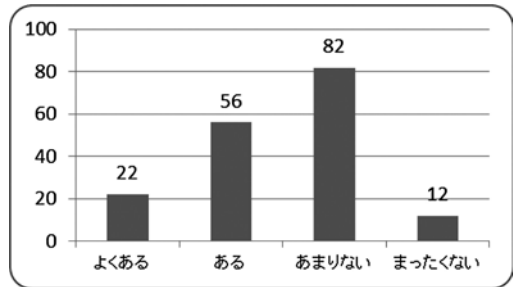


図9 気になる子どもの保護者の言動が気になる子どもと似ていると感じたことがある

でも不全感を持ってしまうことになる。

このように、気になる子どもと似た特性を持つ保護者については、子どもと同様にコミュニケーションのしづらさが大きな課題であり、保育者は、気になる子ども及びその保護者とのコミュニケーションにおいて、二重のコミュニケーション不全感が生まれることが示唆される。

（4）気になる子どもの保護者支援に関する項目

気になる保護者に対応するための人的資源に関する質問には、他の保育者や職員に相談をしている保育者は、「よくしている」が70名（40%）、「している」が95名（54%）であった（図10）。したがって90%以上の保育者が、園内の人的環境を活用し、保護者対応をしている。

また、気になる子どもの保護者対応のためのスキルアップをしているかどうかに関する質問には、「よくしている」が12名（6%）、「している」が69名（39%）であった（図11）。したがって、保護者対応の必要性は感じていながらも、スキルアップは充実していないことがわかった。

続いて、保護者との関わりで配慮していることを自由記述で回答を求めた（表2）。その結果、まず、発信型支援と受信型支援の大きく2つのカテゴリーに分類された。発信型支援は、保育者から保護者に伝えるもので、受信型支援は、保護者の声を受けとめるものである。発信型支援の総数は、128で11カテゴリーに抽出さ

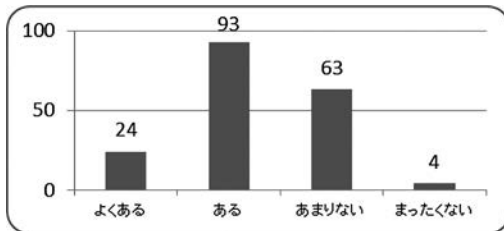


図7 気になる子どもの保護者の対応に困っている

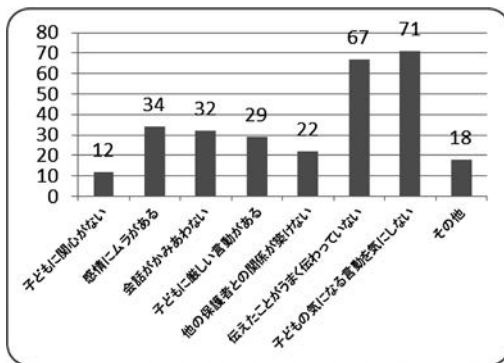


図8 困っている内容

表1 似ている言動の自由記述結果 () は具体例数

<p>会話不成立・意思疎通困難 (27)</p> <p>・使う言葉がいつも同じだったり、会話が上手く続かなかったりするところ。コミュニケーションがとりづらい。その子の母親も文章が上手く書けなかったり、手紙などの連絡事項等の一斉指示での理解が困難だったりする。また他の保護者との関係を築くことが難しい様子が伺える(子どもも同様に他児との関係を築くことが少し難しいようである)。</p>
<p>暴力的言動 (20)</p> <p>・子どもに対して「いいかげんにしなさい」「それ以上したらしばくよ」等、乱暴な言葉を使っており、同じ言葉を子どもも友だちに言っていた。また、直接親が子どもを叩くところは見たことはないが、友だちに対して叩いたり、押したりといった行動が多い。</p>
<p>人間関係 (11)</p> <p>・他の保護者との関係を築くことが難しい様子が伺える(子どもも同様に他児との関係を築くことが少し難しいようである)。</p>
<p>自己中心的行為 (10)</p> <p>・自己中心的なところ。たとえば、自分の思いばかり伝え、周囲の状況を気にしない。子どもが要求することを全て叶えようとする(弁当をもっていきたい、自宅のおもちゃをもっていきたい、と主張したらそれをそのまま持たせるなど)。</p>
<p>理解力・判断力の欠如 (9)</p> <p>・物事をよいか悪いかだけで判断し、どうしてそれがいけないのか、どうすればよかったのか振り返ったり考えたりしないところ。理由や解決方法を考えることを避けようとするところはそっくり。</p>
<p>表情・しぐさ (9)</p> <p>・表情(笑顔)がないところ(3)。</p>
<p>忘れ物が多い (6)</p> <p>・忘れ物をよくするところ(4)。</p>
<p>話し方 (6)</p>
<p>多動傾向 (6)</p> <p>・落ち着きがない。集中力が短い(2)。</p>
<p>感情のムラ (5)</p> <p>・その日によって気分が全く違うところが似ている(2)。</p>
<p>他児への評価 (3)</p>
<p>身体的特徴 (1)</p>
<p>その他 (17)</p>

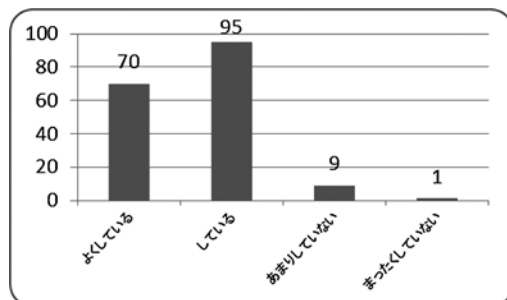


図10 他の保育者・職員に相談している

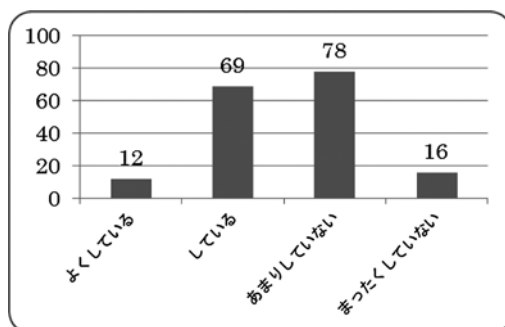


図11 スキルアップの有無について

表2 保護者との関わり自由記述結果（ ）は具体例数

発信型支援 (128)	<何を伝えるか (64) >
	<p>○良いところと苦手なところをバランスよく (36)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・気になることを一つ言う時は他の良いところを何個か言ってから言うようにしている。 ・できない、しようとしない面だけでなく、育ってきている力も同時に伝える。「できる、できない」「よい、悪い」の判断基準だけでなく、育ちの過程の中で今の姿が見られているということが伝わるように話をしている。 <p>○家庭でもできること (13)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こまめに何を伸ばしていったら良いか、また家庭でもできる援助としてどのようなことができるか具体的に伝える。「ここ最近、園でも目標をもって取り組んでいることは3つあります。1つ目は～。園ではこのように援助しているので、おうちでは～を練習してみてください。」など明確に。 <p>○専門機関とつなげる (5)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園での様子を細目に伝え、家庭での様子も聞き、どうしていったらよいか話す時間を設ける。該当する施設や専門家の意見を参考にしながら進めていく。 <p>○その他 (10)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・“今の子ども”の様子、周りの子どもはどのような様子なのかを伝える。
	<どのように伝えるか (63) >
	<p>○まめに連絡 (21)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・些細なことでも報告をするよう心がけている。園生活の様子を聞けると保護者は安心するし、成長もわかり喜んでいる。また、家での様子も聞けるように時間があるときは話をしたり、連絡帳、電話などで情報交換をしている。 ・専門機関との連絡ノートのやり取りを三者間で行っている。保護者にも家庭での様子など書いてもらうようにしている。 <p>○具体的に伝える (19)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どのような場面で、どのような発言をしたのか、行動をとったのか、など相手の中でイメージできるように、ということを中心に心がけている。また、だからダメとか良いという判断を伝えるのではなく、その時にどんな所が成長できたのかななどを伝えようと思っている。 <p>○一度にたくさんを伝えない (2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会話を持つタイミングをはかる。何日かに分けて伝えたいことを話す。保護者の様子を察知して、次の話す時のことをあらかじめ考えるようにしておく。伝えたいことばかりにならないよう、保護者の話もよく聞く。 <p>○たわいもない話 (5)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人とコミュニケーションが苦手な保護者に対しては、日常のたわいもない話や服装の話、子どもの面白かったことなどを話すようにしている。 <p>○否定しない (2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その子のために伝えるべきことはしっかりと伝えつつも、保護者を決して否定するようなことや傷つけるようなことは言わないようにする。 <p>○その他 (14)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「衝動」「多動」「ADHD」「困難」等の言葉を使わないように心掛ける。
	<誰が伝えるか (1) >
<p>○他の教職員もかかわる (1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・所長・主任の先生と子どもの様子を共通理解し、送迎時に声をかけてもらったり、担任へ意見・指導を受けるようにしている。 	

受信型支援 (15)	＜何を受けとめるか (11)＞
	○思いの受容 (11) ・まずはお互いの信頼関係をつくる。保護者の思いを受け取することを大事にして、子どものことを共に育てていこうという立場にこちらがいることをわかってもらえるように接する。
	＜どのように受けとめるか (1)＞
	○寄り添う (1) ・保護者の気持ちが少しでも理解できるように、コミュニケーションを積極的にとりながら、寄り添うように心がけている。
	＜誰が受けとめるか (3)＞
	○受容の共有化 (3) ・保護者の話を出来るだけ聞き、受けとめると共に、保護者もそれぞれ受けとめ方が違うと思うので、どのように伝えるべきか、他の職員にも相談しながら考慮するようにしている。

れた。受信型支援の総数は15で3カテゴリーであった。多くの保育者が、「伝えること」に対する困難さを感じていることが明らかになった。一方で、受信型支援の数は少なく、具体的に行っていることの回答が少なかった。

最も多かったのは、「良いところと苦手なところをバランスよく」伝えることであった。また、どのように伝えるかについては、「具体的に伝える」、「一度にたくさんのを伝えない」など、保護者の特性に応じた細やかな配慮も散見された。

IV. 考察

本稿の結果から、多くの保育者が気になる子どもの増加を感じており、そのうち45%の気になる子どもの保護者が、子どもと類似性があると感じていることが明らかになった。

保育者は、保護者との連携を通して問題意識のコンセンサスを図り、子どもへの支援を検討する。その過程を通して、保護者との適切な関係性の構築を進めるが、保護者の「子どもの気になる言動を気にしない」といった無関心や意思疎通の困難さといった状況に行き当たると、方針が決められない困惑が生じる（尾崎・吉川，2009）。このような状況は、対子ども及び対保護者のコミュニケーションにおいて、二重

の不全感を生むことが考えられる（図12）。つまり、保育者は子どもとの関係に困難さを感じて①、保護者と連携をとろうとするが、そこでも困難さを感じる②。結果として、家庭内の関係性③に変化をもたせる支援を行うことも難しくなるため、気になる子どもとその子どもに似た特性を持つ保護者の「気になる」ところが保持されることになるだろう。一方で、保護者との関係が良好な場合は、家庭内の関係性の変化も期待できるため、結果として、①、②、③のすべての関係性が良好に向かう可能性は高い（図13）。

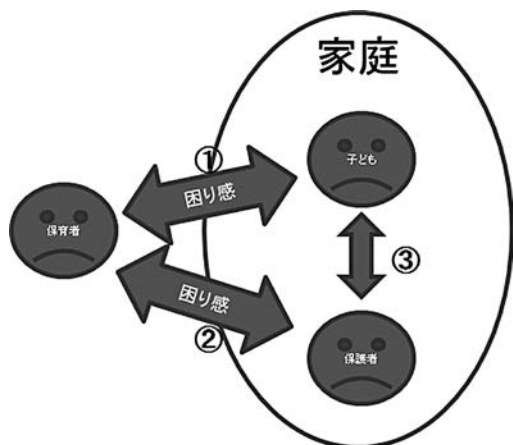


図12 保護者との関係に困っている場合

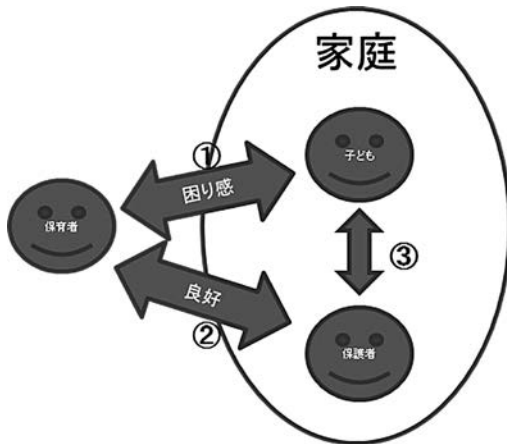


図13 保護者との関係が良好な場合

保護者に対する支援策の一つとして、ペアレント・トレーニングが広く行われている（たとえば、中田，2010；上林，2009）。これは、親子の行動変容を目標とした子育てスキルトレーニングであり、保育現場での導入を検討している研究も見られる（竹内ら，2010）。

しかし、気になる子どもと似た特性を有する保護者にとって、親子の関係性発達の偏りや歪み、遅れといった親子関係の基盤が脆弱な場合には、まず親子の関係性の調整からはじめなければならないだろう。気になる子どもの発達の課題を起点とした育てにくさが親子の相互作用プロセスの枠組みを変化させ、悪循環に陥り、関係性障害（Sameroff, 1992）を想起させることもある。ペアレント・トレーニングは、保護者が子育ての方法を知り、自身の行動を変えるきっかけになる一方で、保護者自身が子育ての責任を抱え込むことを促しかねない。実際には、家族の「気になる」状態は、保育者も含む多様な関係性から生起している可能性が高い。そのため、子育て支援を行う際には、関係性の調整が喫緊の課題になると考えられる。小林（2008）は、障害のある子どもをもつ保護者の子育て支援において、「保護者自身のこと」「子ども自身のこと」「親子の関係」「親子を取り巻く環境（家族）」「親子を取り巻く環境（地域）」の5観点を指摘している。このように、生態学的な視点に基づくことが支援の鍵になると思わ

れる。

つまり、「気になる子ども」とその保護者の類似性を捉えるにあたって、家庭環境によって「気になる」行動が生じているのか、「気になる子ども」の育てにくさが家庭環境に影響を与えているのか、という一要因で原因を探るような二者択一を迫ることの意味はないと考えられる。先述したように、保護者と子どもを含む家庭内の環境が固着する場合、「気になる」状態を強化する構造になっていることが想定される。例えば、保護者の気になる養育と子どもの気になる行動が循環性を持ち、相互に「気になる」状態を強化するような関係性になっていることなどが考えられる。

保育者が実践する園生活での支援によって親子双方の発達凸凹に配慮し、関係性に対して支援をすることは、エピジェネティックに発達障害を生むことの予防にもなる。そのため生態学的なアプローチにより、保護者への直接的な支援だけでなく、間接的に家庭内の関係性を変える支援の可能性を探ることが求められる。その際、「特別な何か」の支援を考えるだけでなく、保育で日常的にしている保護者との関わりの中に支援の芽を見出すことも有効だろうと思われる。

V. 今後の課題

本稿では、アンケートの特性上、気になる子どもの選定を保育者に委ねている。そのため、各保育者が抱く気になる姿に相違が生じている可能性は否めない。この点を踏まえると、気になる保護者との類似性の信用度は低くなるかもしれない。今後は、この調査結果を踏まえ、気になる子どもの定義やその類似性の信用度も含め、実践研究へとつなげていく必要がある。家族関係論的なアプローチを開発・提示し、事例研究などの実証的研究につなげていく必要があるだろう。

引用文献

- 1) 久保山茂樹・齊藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・

- 藤井茂樹・滝川国芳 (2009) : 「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査－幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言－. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要36. 55－75.
- 2) 本莊明子 (2012) : 「気になる」子どもをめぐる研究動向. 愛知教育大学幼児教育研究. 16. 67－75.
- 3) 名須川知子 (1997) : 保育者の「気づき」による変容－気になる子どもの行動解釈をめぐる保育者の見方の変化とその影響－. 学校教育研究 (8). 19－35.
- 4) 刑部育子 (1998) : 「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程に関する関係論的分析. 発達心理学研究 9 (1). 1－11.
- 5) 水内豊和・増田貴人・七木田敦 (2001) : 「ちょっと気になる子ども」の事例にみる保育者の変容過程. 保育学研究 39 (1). 28－35.
- 6) 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子 (2003) : 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査. 発達障害研究 25 (1). 50－61.
- 7) 中村仁志・藤田久美・林隆・木戸久美子・芳原達也 (2005) : 幼稚園および保育園における落ち着きのない子どもの困難性と対応について. 小児保健研究. 64 (1). 26－32.
- 8) 平澤紀子・藤原義博・山根正夫 (2005) : 保育所・園における「気になる・困っている行動」を示す子どもに関する調査研究－障害群からみた該当児の実態と保育者の対応および受けている支援から－. 発達障害研究. 26 (4). 256－267.
- 9) 嶋野重行 (2011) : 「気になる」子どもに関する研究 (3)－幼稚園におけるADHDが疑われる子どもに対する支援と事例－. 盛岡大学短期大学部紀要 (20). 23－33.
- 10) 黒川久美 (2011) : 障害乳幼児の親・家族支援のあり方－療育の場における取り組みから－. 南九州大学人間発達研究1. 25－32.
- 11) 木曾陽子 (2011) : 「気になる子ども」の保護者との関係における保育士の困り感の変容プロセス－保育士の語りの質的分析より－. 保育学研究 49 (2). 200－211.
- 12) 久保山茂樹・小林倫代 (2000) : 保護者の「語り」から考える早期からの教育相談. 国立特殊教育総合研究所教育相談年報21. 11－20.
- 13) 杉山登志郎 (2011) : 発達障害のいま. 講談社現代新書.
- 14) 郷間英世・川越奈津子・宮地知美・郷間安美子・川崎友絵 (2009) : 幼児期の「気になる子」の養育上の問題点と子どもの行動特徴－保育園の巡回相談事例の検討－. 京都教育大学紀要 115. 123－130.
- 15) 橘川佳奈・向笠京子 (2011) : 「気になる子ども」の傾向と支援に関する調査報告－保育士のアンケート結果から－. 保育士養成研究29. 69－77.
- 16) 尾崎啓子・吉川はる奈 (2009) : 私立幼稚園における「気になる子ども」の保育の困難さに関する調査研究－自由記述の分析を中心とて－. 埼玉大学紀要. 58 (2). 197－204.
- 17) 中田洋二郎 (2010) : 発達障害におけるペアレント・トレーニング. 日本小児科学会雑誌114 (12). 1843－1849.
- 18) 上林靖子 (2009) : ペアレント・トレーニング－発達障害の子の育て方がわかる－. 講談社.
- 19) 竹内貞一・坪井寿子・藤後悦子・府川昭世・田中マユミ・佐々木圭子 (2010) : 保育園における「気になる子ども」の現状と支援の課題－足立区内の保育園を対象として－. 東京未来大学研究紀要 (3). 77－83.
- 20) Sameroff, A. J., & Emde, R. N. (1992) : Relationship disturbances in early childhood: a developmental approach. New York: Basic Books. (ザメロフ, A. J.・エムディ, R. N.編 小此木啓吾監修 (2003) 関係性障害－乳幼児の成り立ちとその変遷を探る. 岩崎学術出版社).
- 21) 小林倫代 (2008) : 障害乳幼児を養育している保護者を理解するための視点. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要. 35. 75－88.